

横綱常在不要

札幌市医師会
札幌新川整形外科

村上 俊也

年末よりワイドショーを賑わせる大相撲界のゴシップ。私も大相撲や横綱について考えてみた。

日本の相撲は「すまひ；力くらべの意味」が語源とされる。神事、祭祀、武芸の意味合いがあり、平安時代には天覧試合が七夕行事の余興として行われていたそうである。その興行を主宰し、行司役を務めるのが相撲司家で、公家や大名に庇護され、戦国時代にはすでに記録があったそうである。近世まで、その宗家は細川熊本藩に庇護された吉田司家であった。他に十指に余る有力行司家があったが、現在残るのは木村家、式守家のみである。

ところで、古来より寺社建立などの地鎮祭において、地固め式として腰にしめ縄を巻き、四股を踏み、邪気払いをする習わしがあったそうである。その際、腰に巻く白い麻で編んだ太いしめ縄を「横綱」といった。これを相撲興行が盛り上げるために土俵入りの演出に取り入れたのが吉田司家であるといわれている。1789年谷風、小野川にその使用の免許を与えたのがその始まりである。もとより大相撲の最高位は大関であったので、番付上の地位ではなく別格の称号であった。それが階級として成文化したのは二十世紀に入ってからである。

そもそも、しめ縄は御神体を囲む神祭具である。糸の字の象形をなす紙垂（しで；雷光、稲妻をあらわし豊穰祈願を表す）をつけた縄には常世と現世を隔てる結界の役割があり、しめ縄を巻かれたものは依り代として神の宿るものとされている。商魂たくましい思い付きであったものである。

現在、大相撲を主催する日本相撲協会は公益財団法人である。前身は1925年、相撲文化の継承と普及を目的に認可された。その定款には「相撲道の指導、普及を以て国民の心身向上に寄与する」とあり、全国規模での営利興行を許された唯一の法人である。年6回の本場所ごとに天皇賜杯が与えられる優遇ぶりをご存じのとおり。通常のスポーツ大会では全国大会で優勝しても天皇賜杯は貰えない。特別な荣誉にのみ下賜されるものだからである。大相撲が長い歴史を備え、その取り組みが真剣であるからであろう。しかるに最近、興行に偏り過ぎるとの批判や、力士らによる八百長、暴行、賭博、大麻使用などの品行不正が数々明かされている。その活動実体を想像するに、公益法人が備える通念。例えば社会に還元する学術や慈善、宗教活動に当たるのかと言えよう。今日のように営利優先事業を専らにす

るのであれば税制優遇が得られる公益法人にはなじまない。いっそ公益法人格を返上し、プロレス団体のようになったらよいのではないだろうか。取り組みの脚色も多少なら許されるだろうし、力士同士の星勘定による貸し借りがあっても、世間から非難を被ることも無いだろう。

次に品格に言及される横綱についてである。横綱は自分より格下の者と対戦するわけだから、相撲の質が問われるとされる。勝てば良いという相撲は、大関までに許されるものである。その勝ち姿が大切なのである。大関以下の力士は技量が衰えても、実力に見合う番付で現役を続けることができるが、横綱には降格がなく、常に最高の相撲内容、成績を求められる。横綱になるには日本相撲協会の諮問機関である横綱審議委員会による推挙が必要で、その条件は大関として二場所連続優勝か、それに準じる成績を収める。さらに力士として品格、力量が抜群であるとしている。最近、白鵬がたびたび使う「かち上げ」はいわゆる肘打ちであるが、空手試合（猿臂という）では膝蹴り同様、禁じ手になっている。なぜかという威力が大きく、制御が難しいからである。これは相手の懐へ飛び込んで行く捨て身技であり、弱者が強者に使うものであり、横綱の取り口にはないものである。白鵬が取り組み後、土俵下から物言いをしたことがあったが、下品の極みであった。品格を維持できなくなる前に横綱は自ら引退すべきである。横審は推挙後の横綱の進退についても厳しくあって良いと考える。横綱を作った責任者なのだから。かつて横審メンバーであった内館牧子氏は、二場所連続優勝で自動的に横綱に成れるのなら、横審は要らないと言ったそうである。勝ち星を挙げるのが横綱の責務だと朝青龍は言ったそうだが、私はそうは思わない。勝てば良いだけであれば、千代の富士はもっと勝ち星を挙げていたのではないだろうか。横綱ぶりを国民は見ている。日本相撲協会が今後も堅苦しい因習の中で国技、相撲道を維持するというのなら、相撲は単なる興行ではなく真剣試合であるべきである。ゆえに力士生命は短命であり、そこに共感と感動が生まれるのである。また横綱は神格であるという日本の故事を守るべきである。横綱は特別なときに生まれる別格の力士である。すなわち横綱不在が常であり、世間もマスコミも横綱不在を嘆く必要はないのである。